

からだ言葉にみる感情教育の可能性に関する一考察

社浦 竜太, 富山 敦史

One Consideration About the Possibility of the Emotional
Education in Body Words

Ryuta SHAURA, Atsushi TOMIYAMA

2017年9月8日受理

抄 録

近年、学校教育では対応が困難な、いじめや小1プロブレムのような出来事が起きている。こういった問題が起こる要因の一つとして、感情教育の欠如を指摘する声がある。海外や日本の学校教育における感情教育を比較してみると、欧米においては社会性と感情の学習などに代表されるような感情教育が、教育界に広く取り入れられている現状がある。それに対し、日本における感情教育の取り組みはこれから広く学校教育に取り入れていこうとする段にある。そこで、本稿では、日常に根差したすでに我々の日常にあるもの、加えて感情を教育しうる可能性を有するものとして「からだ言葉」に注目し、「からだ言葉」がもつ感情教育の可能性に言及し、さらにそれを受け、次期学習指導要領におけるからだ言葉による感情教育の可能性について、一提案を試みたい。

キーワード：からだ言葉, 感情教育, 感情リテラシー, 身体, 学習指導要領

1. 問題と目的

今日の学校教育では対応が困難な、いじめや小1プロブレムのような出来事が起きている。本間（2003）によるいじめの加害者に関する調査によれば、いじめ加害者のいじめ停止に関連する要因として、道徳論にとどまらない加害者の感情面に踏み込んだ取り組み、例えばいじめ加害者の共感性（共感的苦痛）や自尊感情を高める取り組みといった加害者の感情リテラシー¹を教育する必要性を示唆している。また川村（2001）は、小1プロブレムが生じる要因を様々としながら、その中でも感情教育の欠如を要因の一つとしてあげ、その必要性を指摘している（川村, 2001）。感情リテラシーを教育する必要性は様々な形で指摘はされているが、学校教育の中において感情教育はどのように展開しているのであろうか。

海外の感情教育に目を向けてみると、欧米では、学校予防教育において行動や認知

などをターゲットとしたソーシャルスキルトレーニング（Social Skills Training: 以下 SST）などのプログラムが学校予防教育の中心として実施されていたが、2000 年以降は、社会性と感情の学習（Social and Emotional learning: 以下 SEL）に代表されるように感情をターゲットとした予防教育が、欧米の教育界に広く取り入れられている状況がある（渡辺, 2013）。SST から SEL への移行、つまり社会性の教育だけでなく感情の教育が付加された背景には、Gardner（1983）の多重知能理論や、Mayer & Salovey（1997）の感情知能（Emotional Intelligence）、さらに Goleman（1995）の EQ（こころの知能指数）など、こういった一連の感情に関わる様々な概念の出現が大きく影響している。一方、今日の日本の感情教育に目を向けてみると、感情に関する知識やリテラシーを含めたものを教育するという視点は、近年いくつか確認される（小泉, 2005；原田・渡辺, 2011）。しかし、次期指導要領を眺めてみても、感情そのものを学習させるというよりは、むしろ感情は様々な体験や学習などを通じて自然と育まれるといった教育の付随物のような存在として位置づけられている可能性がある。換言すると、現在の教育現場において、感情それ自体を合理的に教育する対象として認証されてこなかった経緯があるものと思われる（文部科学省, 2017a・2017b）。

ここまで感情教育の必要性和海外と日本の感情教育の現状にふれてきたが、ここで、日本の文化の中にある感情教育の可能性に目を向けてみたい。春木（1988）は、心理行動学的な観点から「からだ言葉」がもつ可能性に言及している。それによれば、からだ言葉とは、日常生活の中でとりかわされる身体の一部（頭、腹など）を用いた用語で、心理的状态（気分や感情）と身体は切り離せないもの、またからだ言葉を通して、からだと精神を省察し得る可能性があるものと言及している。

そこで、本稿において、からだ言葉におけるからだと感情に注目し、感情リテラシーとしての特徴を整理し、からだ言葉にみる感情教育の可能性を論じてみたい。またからだ言葉における感情教育の可能性を論じた後、次期学習指導要領とからだ言葉による感情教育の可能性に言及してみたい。

2. 方法

からだ言葉辞典（東郷, 2003）から、感情に関連するからだ言葉を抜粋する。からだ言葉を抜粋する際の基準となる感情を表す言葉は、今日、一般的に使用されていない表現・言葉もあることを想定し、感情表現辞典（中村, 1993）を基準とした。今回、からだ言葉の中でも、「頭」、「額」、「眉」、「目」、「鼻」、「口」、「唇」をとりあげる。

3. それぞれの身体部位を使った、感情に関するからだ言葉

3- 1. 「頭」を使った感情に関するからだ言葉

「頭」を使ったからだ言葉における、身体反応や身体反応の変化と感情を結び付け

た言葉をもてみると (Table1 参照), 「頭が痛い」や「頭が重い」などは, 不安などの心理的な要因による身体的反応を表した言葉とみることができる。また「頭から湯気をたてる」や「頭に来る」, 「頭に血がのぼる」は, 血管の収縮による血流, 血圧, 体温の変化に怒りという感情を結び付けた言葉であると思われる。身体反応もしくは身体反応の変化と感情を結び付けた言葉以外に, イメージと感情を結び付けていると思われる言葉もある。例えば, 「頭から水を浴びたよう」は, 頭から水を突然浴びたようなイメージと, 突然の驚きや恐れとを結び付けた言葉である。また「頭をもたげる」は, 憎しみ等の感情が湧き起こってくる様を理解しやすいイメージに置き換えた言葉と思われる。

Table1 感情に関連したからだ言葉 (頭)

身体部位	からだ言葉	意味
頭	頭が痛い	心配事があって心が落ち着かない, 悩み困った状態
	頭が重い	心配事あって気分がすっきりしない
	頭から水を浴びたよう	突然に事が起こって, 驚き恐れるさま
	頭から湯気を立てる	かんかんになって怒るさま。はげしく怒るさま 激怒
	頭に来る	怒りなどでかっとなる 癪にさわる かっとする
	頭に血がのぼる	怒りなどでかっとなる 逆上する
	頭の中が真っ白になる	一瞬, 何も考えられない状態になる
	頭をもたげる	疑念, 憎悪などが, 心の中で次第に大きくなる

3-2. 「額」「眉」を使った感情に関するからだ言葉

この項では, 「額」と「眉」を使った感情に関するからだ言葉をとりあげる (Table2 を参照)。「額」と「眉」を一緒にとりあげる理由として, 同じような表現で同義の言葉が見受けられるためである。「額に皺を寄せる」は, 困惑や苦悩, 鬱々としている感情を表した言葉で, 同義のからだ言葉に「眉間に皺を寄せる」という言葉がある。これは, 表情に関連した眉の間にある皺筋の状態と困惑や鬱などの感情を結び付けた言葉である。他にも「眉」という言葉を使った同義のからだ言葉に「愁眉」, 「眉をしかめる」などの言葉がある。

「額に筋をたてる」という言葉は, 身体反応の変化を示唆した言葉と思われる。「筋」というのは血管のことを指し, 血管の収縮による血流, 血圧の変化と怒りの感情を結び付けた言葉である。「額が曇る (眉を曇らせる)」は, 心配事や不快なことが起こって顔をしかめるという意味で, 不安などの感情表現を, 天候が曇りの状態に例えて説明した言葉といえよう。対になる言葉として, 「額が晴れやか」という言葉もある。

Table2 感情に関連したからだ言葉 (額と眉)

身体部位	からだ言葉	意味
額	額が曇る	不安な顔つきになる
	額に皺を寄せる	困惑しているさま
	額から汗が出る	非常に恥ずかしく感じるさま
	額に筋を立てる	額に青筋を立てて、激しく腹をたてる
	額に手をあてる	困ったときなどの額に手をあてるしぐさ 思案にくれるさま
眉	眉間に皺を寄せる	心配や憂い、不快等を感じて眉間に皺をよせる
	眉をしかめる	心配や憂い、不快等を感じて眉間に皺をよせる
	眉を擡める (ひそめる)	心配や憂い、不快等を感じて眉間に皺をよせる
	愁眉	心配や憂い、不快等を感じて眉間に皺をよせる
	眉を逆立てる	眉を吊り上げて、非常に怒るさま

3-3. 「目」を使った感情に関するからだ言葉

「目は口ほどにものいう」というからだ言葉があるように、「目 (眼)」という言葉を使用した感情に関連したからだ言葉も少なくない。「目 (眼)」を使った感情に関するからだ言葉をいくつかまとめてみた (Table3 参照)。

「白い目で見る」というからだ言葉は、敵意や軽蔑の情を込めて人を見るさまを意味する。また対となるからだ言葉に、「青眼」という言葉がある。「青眼」とは黒い瞳を輝かせて、好意を持っている対象を見るさまを意味する。「白い目」とは眼球の白い部分のことで、好意の感情の有無によって、その感情を向けている対象を見る際、瞳における黒目の占有の比率が違うことを示唆しているものと思われる。

「目が据わる」というからだ言葉は、同じところをじっと見つめて、目の玉を少しも動かさない様と冷たい怒りの感情を結び付けた言葉である。

「目に角を立てる」は、目じりをするどく角をたて、険しい目つきになっているさまと怒りを結び付けた言葉であるが、同義のからだ言葉は他に、「目を吊り上げる」や「目くじらをたてる」という言葉がある。これは目の周りの筋肉の動きが感情表現と密接であることを示している。

3-4. 「鼻・口・唇」を使った感情に関するからだ言葉

この項では、「鼻」、「口」、「唇」という言葉を使ったからだ言葉についてみてみたい (Table4 参照)。「小鼻を膨らます」というからだ言葉であるが、「小鼻」について説明を付け加えると、「小鼻」は鼻の左右にあって、鼻孔の上に当たる小高い部分を指す。つまり、鼻孔を含めた「小鼻」が膨らんでいる状態と、不満という心理をつなげているものが「小鼻を膨らます」というからだ言葉である。また「鼻をしかめる」は、鼻の付け根の部分の筋肉が収縮し皺をよせている状態であり、不機嫌な心理状態を表

している。

「口」・「唇」を使ったからだ言葉には、「口を尖らせる」もしくは「唇を尖らす」がある。口（唇）を前へ突き出している様と、怒りや不平、不満の感情をつないでいる言葉が「口（唇）を尖らす」である。

Table3 感情に関連したからだ言葉（目・眼）

身体部位	からだ言葉	意味
目	白い目で見ると	「白い目」は、眼球の白い部分を多く見せた冷たい目つき 敵意や軽蔑の情を込めて人を見るさま
	白目を剥く	憎しみや憎悪の気持ちを込めて、他人を鋭くにらみつけるさま
	青眼	黒い瞳を輝かせて、うれしそうに人を迎える目
	角目立つ	しだいにとげとげしい目つきになる
	目・眼に角をたてる	怒って険しい目つきになる。鋭くとげとげしい目でにらむ 目を三角にする
	目を吊り上げる	目を上の方にあげる 怒りの形相
	目が据わる	同じところをじっと見て、目の玉を少しも動かさないこと 怒ったりした時のしぐさ
	目尻を下げる	満足な表情

Table4 感情に関連したからだ言葉（鼻・口・唇）

身体部位	からだ言葉	意味
鼻	小鼻を膨らます	不満そうな様子を見せるさま
	鼻で笑う 鼻の先で笑う	相手を軽蔑して冷笑する様子
	鼻を怒らす	怒って鼻をびくびくする
	鼻をしかめる	渋い表情、不機嫌なさま
口	空いた口が塞がらない	あまりに非常識な相手の態度や言動に驚き呆れている様子
	口を尖らせる	怒りの気持ちを表している様子
唇	唇を尖らす	不平・不満を表すしぐさ
	唇を震わせる	怒りや恐怖のために、言葉が口から出ないさま
	唇を歪める	不快な気持ちで、受け答えるのを渋る、ものを言いたくない様子

4. からだ言葉にみる感情リテラシーの特徴、感情教育ツールとしての可能性

ここまで、からだ言葉に使われている様々なからだの部位と感情に注目してきた。次にここまで注目してきたことを、感情リテラシーの観点から整理して三点にまとめてみたい。

まず一つ目の特徴として、からだ言葉には、からだ言葉を使用し、身体部位に意識

を向けることで、感情を知覚するもしくは感情を理解することを促進する可能性を有している点である。諏訪(2008)は、自分のからだと環境(人も含めて)の間に起こった事象、そしてその環境で感じ取った体感などの総体を「からだメタ認知ⁱⁱ」と称している。そして、このからだメタ認知と言葉を常に結びつける身体知に関する学習を提唱している。諏訪(2008)が提唱する身体知学習に則して、感情、からだ言葉、からだ(身体)について例を織り交ぜてあらためて考えてみると、自分のからだと環境の間で起こった事象を感情(怒り)とし、その環境で感じ取った「からだメタ認知」としての体感(血流の変化)と感情(怒り)を結び付けるものがからだ言葉(額に筋をたてる)となる。これは感情に関する身体知学習といえるのではないだろうか。春木(1988)が指摘しているように、からだ言葉には対他的側面だけでなく、対自的な側面もあり、感情教育ツールとしてのからだ言葉を想定した場合、その用途は広いものと思われる。

次にあげる特徴は、自他の感情を知覚する際、手がかりが多様で、具体的であるという点である。身体や所作の形態の知覚(「顔を膨らませる」等)や、色の知覚(「頬を染める」等)、音の知覚(今回は例示しなかったが、「舌打ち」など)、血流・血圧・体温の変化の知覚(「筋を立てる」等)、固有受容覚の知覚(今回は例示しなかったが、「拳をにぎる」等)と実にヴァリエーションに富んでいる。感情の知覚や理解の手がかりが、具体的かつ多様であるということは、感情を教育しうる可能性を高めるものと思われる。

最後にあげる特徴は、からだ言葉が「感情の強度」や「人は複数の感情を一時にもちうることを」を知覚・理解し得るという点である。「額に筋をたてる」と「口を尖らせる」というからだ言葉はどちらも怒りの感情を表現する際に使用されるが、「額に筋をたてる」というからだ言葉は激しい怒り、つまり強い強度の怒りを知覚・理解することができるからだ言葉である。一方の「口を尖らせる」というからだ言葉は怒りという感情だけでなく、不平・不満も内包していることを知覚・理解しうるからだ言葉である。このように、様々な状況によって感情の強さが違うことや、人は単純に一つの感情だけでなく複数の感情をもちうることを、からだ言葉は知らしめてくれる可能性を秘めている。

からだ言葉における感情の知覚・理解に特化した感情リテラシーを教育するツールとしてのからだ言葉の可能性についてここまで言及してきたが、次項において、からだ言葉と次期学習指導要領等について言及してみたい。

5. おわりに からだ言葉と次期学習指導要領

最後に、次期学習指導要領において、感情教育もしくは身体知学習としてのからだ言葉を位置づけるならば、どのように位置づけることができるのか、そういった可能性について、幼児教育と学校教育の接続の観点から言及してみたい。現行の幼稚園教育要領(文部科学省, 2017b)では、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」

の5領域を相互に関連させて様々な体験や活動を通して育むことを目的としている。次期学習指導要領では幼児教育から小学校教育への接続のみならず中学校、高等学校への学びの過程と、さらには大学や社会に至る一貫した「育成すべき資質・能力」が3つ示された（無藤，2016；Table5を参照）。

Table5 次期学習指導要領における3つの「育成すべき資質・能力」

ア	「知識・技能の基礎」（遊びや生活の中で、豊かな体験を通じて、何を感じたり、何に気付いたり、何が分かったり、何ができるようになるのか）
イ	「思考力・判断力・表現力等の基礎」（遊びや生活の中で、気付いたこと、できるようになったことなども使いながら、どう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするか）
ウ	「学びに向かう力・人間性等」（心情、意欲、態度が育つ中で、いかによりよい生活を営むか）

さらに、上記の具体的な姿として、次期幼稚園教育要領（文部科学省，2017b）では、現行の5領域を維持しつつ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（5歳児修了時）」として、「1. 健康な心と体」、「2. 自立心」、「3. 協同性」、「4. 道徳性・規範意識の芽生え」、「5. 社会生活との関わり」、「6. 思考力の芽生え」、「7. 自然との関わり・生命尊重」、「8. 数量・図形、文字等への関心・感覚」、「9. 言葉による伝え合い」、「10. 豊かな感性と表現」といった10の事項が示された。

これらの「育成すべき資質・能力」、「育ってほしい姿」をもとに、小学校では「生活科」を核とした「スタートカリキュラム」を設定し、各教科への円滑な学びの接続を図っている。これら多岐にわたる、幼児期の終わりまでに望まれる「姿」は相互に関連し合っているものと思われるが、それをどのように、各教科への学びに結びつけるのか、今まで以上に現場教員の授業構成力が求められる。

幼児教育における「育成すべき資質・能力」の中で示されているものは、「知的な力と情意的また協働的な力からなり、相互に循環的に育成されていく」と説明されている（無藤，2016）。また、その文言の中で、「情意的な力」を育成すべき能力の一つとして明示している。そこで「情意的な力」の育成に着目し、その育成の方略として感情教育としてのからだ言葉に可能性を見出すことはできないであろうか。

例えば、幼児教育の場で従来から行われてきた取り組みとして、「伝統文化」や「あそび」を活かした取り組みがある。この取り組みに、「感情リテラシー」の捉え方を活かし再構成してみることもできるかもしれない。身体部位を使った手遊びうたでは、まずその身体部位に注意を向け、その身体部位に関するからだ言葉の数々を紹介していく。そして、その部位に込められた感覚や感情を動作化しつつ理解し深め合う。こうしたからだ言葉を意識した実践を組み合わせることにより、情意的な力、つまり感情リテラシーの力が生まれ、感情リテラシーの力が育まれることで他者と協働する力

が育くまれる、そういう循環が生まれることが期待される。

ここまで、からだ言葉による教育の可能性を述べてきたが、その意義と目的、子どもたちの実態を踏まえて、環境を構成し授業化していくのは教員である。次期学習指導要領を貫くキーワードとして「主体的・対話的で深い学び」が挙げられ、その実現に向けて各教科等での「見方・考え方」を促進させることが教員に提起されている（文部科学省，2017a・2017b）。この文脈での「深い学び」の主体は「子どもたち」にあることは違いない。しかし、それを実現させる要素としての教員の観点から「深い学び」という言葉を考えたとき、その言葉はあまりにも多義的である。「深い学び」とあるが、反対に「浅い学び」とはどのようなものであるのか。また、「深い」・「浅い」を評価するのは、教員なのか子ども自身なのか、このような疑問が次々と湧き起こってくる。様々な疑問に対し、一つ一つ個別に考察ををしていく必要はあるが、本稿のキーワードであるからだ言葉による教育の観点から考えた場合、「深い学び」への誘いの第一歩は「身体化を伴う学び」にあるのではないだろうか。

国語教育の現場では、意図や感情といった心情描写の読み取りをどのように促進するかといったことが課題として指摘されている（辻，2015）。詳述は稿を改めたいが、こういった課題に対して、例えば、文章に書かれていることを単に知識として頭の中で操作するのではなく、文章に書かれている状況を動作化し、その状況を読み取る試みをすすめて、感情を読み取るという手法も期待される。まるで演劇のようだが、「演じる」ことでしか、読み取れない、認識できない、理解できないこともあるように思われる。

今回の学習指導要領の改訂の中で言及されたアクティブラーニングも、現場の教員の危機感からでてきたのであろう。本当に使える力を子どもたちに身に付けてもらうために、学校教育の中で、どのような取り組みを展開していったらよいのであろうか。アクティブラーニングということで、現場では「話し合い活動」が推奨されているが、単なる話し合いにとどまらず、「身体化を伴う学び」、すなわち、身体の動き・身体の反応の変化で心（感情）を表現する、また心（感情）を身体で表現するという、演劇的読解、演劇的手法も求められるようになるのではないかと考え、期待している。

教員が「深い学び」を実現させる、あるいは子どもたちが「深い学び」を実現する要素として、「身体表現」、「動作化」、「演じること」で感情を読み解く。その際に、からだ言葉による「感情リテラシー」の捉え方が取り組みの一助となるのではないだろうか。

引用文献・参考文献

- 諏訪正樹 2008 からだで学ぶことの意味：学び・教育における身体性 Keio SFC Journal, 12 (2) , 9-18.
- Gardner, H. 1983 *Frames of mind: The theory of multiple intelligences*. New York: Basic Book.
- Goleman, D. 1995 *Emotional intelligence*. New York: Bantam Books. (土屋京子訳)

1996『EQ』講談社)

- 原田恵理子・渡辺弥生 2011 高校生を対象とする感情の認知に焦点をあてたソーシャルスキルトレーニングの効果 カウンセリング研究, 44, 81 - 91.
- 春木豊 1988 「からだ言葉」の心理行動学：身体分析と体動訓練．早稲田大学人間科学研究, 1 (1), 73-82.
- 本間友巳 2003 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応 教育心理学研究, 51 (4), 390-400.
- 川村登喜子 2001 子どもの共通理解を深める保育所・幼稚園と小学校の連携 学事出版.
- 小泉令三 2005 社会性と情動の学習 (SEL) の導入と展開に向けて 福岡教育大学紀要, 54 (4), 113-121.
- Mayer, J. D., & Salovey, P. (1997) . What is emotional intelligence. *Emotional development and emotional intelligence*. Basic Books, 3-31.
- 文部科学省 2017a 小学校学習指導要領解説 .
- 文部科学省 2017b 幼稚園教育要領解説 .
- 無藤隆 2016 今後の幼児教育とは 一幼稚園教育要領, 保育所保育指針, 幼保連携型認定こども園教育・保育要領, 小学校学習指導要領の改訂を受けて 国立教育政策研究所 . Retrieved from http://www.nier.go.jp/06_jigyoushugi/symposium/sympo_h28/files/05_muto.pdf
- 中村明 (編) 1993 感情表現辞典, 東京堂出版 .
- 辻尚宏 2015 「書き手」の意図や考えを把握しようとする姿勢の育成 一読み比べ要約を通して一 国語教育研究, 519, 44-45.
- 東郷吉男 (編) 2003 からだ言葉辞典, 東京堂出版 .
- 渡辺弥生 2016 児童の感情リテラシーは教育しうるか 一発達のアウトラインと支援のありかた一 エモーション・スタディーズ, 2 (1), 16-24.

脚注

- ⁱ 渡辺 (2016) によれば, 感情リテラシーの名称の用いられ方は研究者によって, まちまちであり, 感情知能, 感情知性と呼ばれたりする。本稿においては, 渡辺 (2016) にならい, 授業で教育可能になるスキルに近い意味, そして読み書きのリテラシーのような基礎能力の意味合いを込めたものを感情リテラシーとする。
- ⁱⁱ からだメタ認知は, 生活文脈の中で, 身体と取り巻く環境のあいだに成り立っているものごとの実態をことばで表現しようとすることによって, 実態に留意し, 実態についての自分なりの意味や解釈を醸成し, 常にことばと実態 (特に生活文脈における体感) を結び付ける概念であり方法論として諏訪 (2008) が提唱したものの。

